

陶 工 鶯 谷 庄 平

木 村 弘 道

鶯谷庄平も最近はようやく認められる様になり、故平野耕輔先生記念会編「日本の陶磁」や、座右宝刊行会編「世界陶磁全集 6 江戸篇下」或は雑誌「ちやわん」等、日本陶磁史関係の文献は勿論、国立博物館編「日本美術略史改訂新版」等、日本美術史の上にも近世に於ける最後の名工と云われ、その名を連ねる様になって来た。併しその伝記や作品等は、明治の終りまで活躍した人としては、はやくも誤伝や偽物も多くなり、彼の評価を誤まるおそれがある様に思われるので、現在までに調べ得たところを紹介することにする。

鶯谷庄平は、金沢鶯谷窯の一陶工であるが、鶯谷窯と云うのは、青木木米が文化三年卯辰山平兵衛の瓦窯で試焼し、春日山焼を興して以来、瓦師平兵衛の卯辰山焼をへて、明治四年旧藩土前田肇と久田宗兵衛の兩人が、鶯谷に陶窯を築いて雅品を製したのに始る。

当時は、横萩一光が腕を振り、暫くして明治十年頃、鶯谷庄平に譲り、その後庄平また、同十八年野崎佐吉に譲り、佐吉これを経営すること二十余年、明治四十二年富田忠男が譲り受け、昭和十二年までつづけその後納賀花山の有となり、現在も尚煙を吐いている伝統ある窯である。

鶯谷庄平の姓名

鶯谷庄平は、姓を松屋とか、松谷と云い、名を莊平或は庄米と書かれたりしているが、旧は屋号を松屋と云っており、墓石や過去帳を調査すると庄平以前の人には、松屋となつて居るが、明治六年に屋号を描字とすることを許された時に、松屋はあまり屋号らしいと云うので松谷と改め、その後には又鶯谷と改めた様である。

庄米は号で、庄は莊の略字であるが、作品等の銘には、皆庄と書いているし、金沢市役所の戸籍原本も、鶯谷庄平となつているから、鶯谷庄平とした方が良い様に思う。

家 庭

今度金沢市役所で除籍の原簿を調べたところ、庄平と庄平の後妻「とし」のが見つかったので、これと彼の墓所である善導寺の過去帳及び旧墓所である石動大念寺の過去帳等に抛り、彼の家庭を察するに、鶯谷庄平は除籍の原本によれば、本籍は石川県金沢市下小川町六十三番地で、天保三年二月三日石川県金沢区水車町中村弥十郎の二男として生れたことになっている。庄平は明治四十五年三月六日に歿しているので、天保三年出生であれば八十一歳で歿したことになる。

併し金沢市の戸籍の原本は、明治二十年頃に形式を変更した為め整理されたが、当時の戸籍簿はまだ正確を欠いて居た様であり、庄平の生年の天保元年を天保三年と書き誤つたのがそのままになっているものと思われる。当時の庄平を直接識つて居る高村右暁、富田忠男、善導寺の住職川南教法の諸氏に問い正したところ庄平の歿したのは確かに八十三歳であつたと云つて居り、善導寺の過去帳にも、明治四十五年の項に、「三月六日鶯谷庄平八十三歳病死」としてあり、作品にも八十二歳と歳を入れたものも現存する故、庄平の出生は、天保元年二月三日が正しいのであらうと思われる。

慶応二年九月二十日、庄平三十七歳で、鶯谷源兵衛死後養子として入籍し、同日相続している。

鶯谷源兵衛については生年月日等は解らず、善導寺にある墓石に「天保十亥年七月松屋源兵衛」とあり、過去帳を調べたが見当らなかつた。

然し大念寺の過去帳に「天保七丙申年延譽真寿信女八月廿二日金沢松屋源兵衛母」、「元治二乙丑年善譽浄娘信士九月七日金沢松屋源兵衛」と云うのがあつた。尚元治二乙丑年とあるが、元治は一年のみで改元となつて居り、これは慶応元年のことであらうと考えられる。

又善導寺の過去帳の、明治二己年の項に、「二月三日間譽為林信女松屋源兵衛妻」と云うのがあるが大念寺のでは廿四日となつている。

庄平の妻については、市の除籍の原本には、明治十九年三月十九日庄平五十七歳に、石川県石川郡泉村米



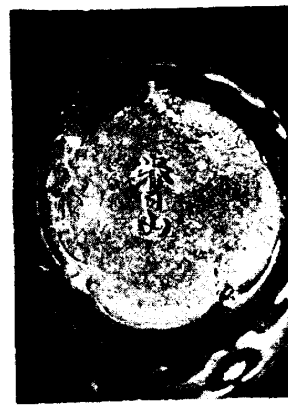
(1)



(2)



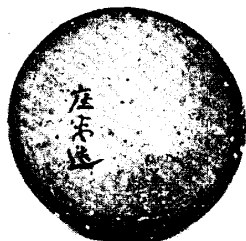
(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)



(9)



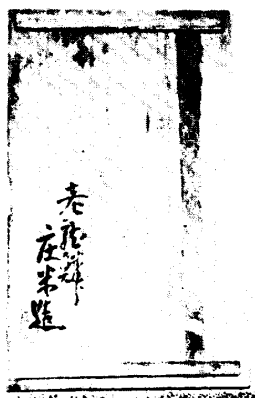
(10)



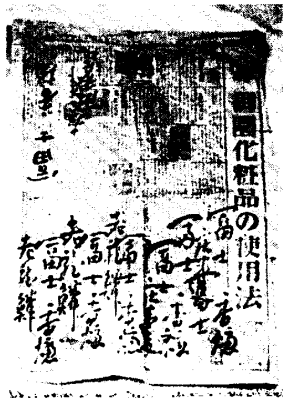
(11)



(12)



(13)




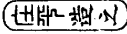






(14)



(15)

(圖 版 説 明)

- (1) 八十二翁   と有り、庄平晩年の菓子器の銘。この  印を最も多く用いている。
- (2) 初期の掛花生に用いてある  の印。
- (3) 蟹形香合の  の陶印。
- (4) 盃の「春日山」の陶印。
- (5) 染付で  と書いた水盤の銘。
- (6) 鉄砂で書いた「庄平造」の銘。
- (7) 「行年七十二翁春日山庄米造」の刻銘。
- (8) 箱の印である  ・  の印を作品に捺している。
- (9) 盃の「八十翁藪庵造」の刻銘。
- (10) 花生の「老龍鱗」の刻銘。
- (11) (10)図に同じ。
- (12) 富士形香炉の箱書。
- (13) (12)の裏。
- (14) 富士形香炉の箱書をするのに種々の書体で下書きをした新聞紙。
- (15) 牛童児の置物

村与三右衛門長女「スイ」天保十三年四月四日生が妻として入籍したことになっているが、善導寺の過去帳には、「明治八亥年一月廿三日法感貞性信女 鶯谷庄平妻」というのがあり、大念寺では「廿四日金沢卯辰 鶯谷庄兵衛妻」となっている。

これより見て生前の名等は解らないが、明治二十年役所へ届ける以前に妻が有り、「スイ」は後妻であるに間違いない、と思われる。除籍の原本では、「スイ」は明治二十六年八月十七日死亡しているが、過去帳には見当らなかつた。

その後庄平は、又後妻をもらっている。すなわち除籍の原本によれば、明治三十年八月三日に庄平六十八歳で、金沢市上野町平民武作太郎養叔母亡吉右衛門三女「とし」天保四年八月晦日生が庄平の後妻として入籍している。

ただここでは「とし」の生年に疑問があり、実際は天保四年よりも後らしく、「とし」が嘗て善導寺の住職に自分は戸籍が間違っており、それより若いのだと云っていたそうである。

庄平は実子が無いので、度々養子等をもらつて居る。明治二十六年八月三十一日に石川県能美郡冲杉村字若杉黒田四郎左衛門弟亡五郎右衛門三男磯松慶応二年八月十二日生が養嗣子として入籍しており、明治二十六年十月二十四日には、金沢市堅町中野吉次郎妹亡安左衛門長女「きく」明治八年十二月十二日生が養嗣子磯松の妻として入籍しているが、明治二十九年二月二十四日に離婚し中野吉次郎方へ復帰している。

明治二十九年三月二十一日には、金沢市長田町栗野孫吉長女「フサ」明治十一年六月二十九日生が磯松の後妻として入籍し、明治三十年七月十九日に離婚し実家に帰り、同年同月二十六日には、磯松も離婚し黒田四郎左衛門方へ復帰している。

ここで二人目の後妻「とし」をもらつたのであるが、その後明治三十三年一月八日に、石川県能美郡湯野村字湯谷ヨ六十二番地乙、亡河原文右衛門母「志の」河原市三郎弟「八三郎」明治四年七月七日生が養子として入籍し、同三十五年六月二十一日に協議離婚して実家に帰つており、又明治三十七年三月四日に、金沢市小立野新町七十二番地父「野上与三郎」母「つね」の長女「春」明治十九年九月十日生が養女として入籍して、同三十九年七月六日には、これも協議離婚し実家に復帰している。

この後は養子等を貰わず、後妻「とし」と二人暮であつたらしい。

庄平歿後明治四十五年三月六日に後妻「とし」が親族会の選定に因り家督を相続し、大正十年三月二十七日下小川町にて死亡し、家主の島村駒太郎が葬儀万端を取り行つたという。

昭和二十三年六月三十日全員除籍となり、日本戸籍法により消除されている。

以上でも察せられる様に庄平は家庭的には恵まれず極めて不遇で、今では家も絶えて善導寺の墓も無縁となつている。

庄平の略歴

庄平は今まで金沢市高道町又は金屋町、或は小川町の町家の「松屋」に生れたと云われて居たが、前述した如く、庄平は天保元年二月三日に水車町中村弥十郎の二男として生れ、慶応二年九月二十日に養子として小川町の同家へ入つたとするのが正しい。

然しその後暫く金屋町に住して松屋或は松谷庄平と称していたこともある様である。

庄平若年の頃は、金沢町会所札差役を勤め、能書の称があつたが、廃藩後原呉山に就いて茶道及び製陶を習い、「松谷」と印して作陶した。

この年代のものはほんの試焼程度で現存するのも、高村右暁氏所有の屋形焼締の置物只一つの様である。それは「松屋」を「松谷」と改めた明治六年頃のものと思われる作品で、まだ極めて稚拙なものである。

その後明治八年頃金沢市鶯谷久田窯の横萩一光に製陶を学び、明治十年頃京都に遊び、五条坂で陶法を学んだが、其の師は誰であるか不明である。一・二年の後帰つて鶯谷に造窯し、陶工として出発した。

京都よりは二・三名の陶工を伴つて来て、可成り大規模に始めたようであるが、彼の製品は、自分の趣味にまかせ、雅味を主とし、余りにも渋味勝ちであつたために当時に於ては、余りに世間から歓迎されず次第に衰微したが、飽くまでも貧乏と戦いながら、時代に仰合せず自己の主義に一貫し、八十三歳で死亡する迄、雅味を主とした作品の製作に終始した。

当時は庄平と全然反対の方向に進み、仁清に私淑して、極端なまでに華奢な作品を作つていた横萩一光と折半すれば、丁度良い品が出来るだろうと評されていたそうである。

従つて陶器師としては成功せず、失敗を重ね生活のために日用品の播鉢等の如きものを焼いて、六・七年も続けたが、遂に止むなく明治十八年窯を野崎佐吉に

譲り、自分は小川町の小さな家に移り其処で作った品を鶯谷の窯で焼成してもらっていた。この頃の作品は、主として南蛮或は、備前風の花生や、急須、盃等であつたようである。

「松谷」の次は「庄平」の印を押したが、中年の頃から、青木木米を慕つて「庄米」と改めた。其の頃木米青磁の研究に没頭し、春日山の麓油木山に新しく窯を築いた。ここは以前木米が此の辺の土を取つて焼いたと云うので、一名唐津山と呼ばれているようである。

此処に於て、初めて自分の意に叶う作品が出来た様で、刷毛目や三島模様の茶碗や、小鉢等を作り、箱に春日山庄米と書いたりして居り、此の時代の作品が最も秀れて居る。

此処で四・五年も焼いたが、窯で足を負傷した為、此の窯を廢めて又宅で作つては鶯谷の窯で焼いた。此頃より少しづつ世間に認められる様になり「鶯谷の庄平」と人が呼ぶようになった。

彼は乾山風のものを作つて見たいと思つたが、絵が描けないので、高村右晔に相談して柿内右隣に紹介してもらつたが、絵はどれも駄目なので、乾山風をあきらめて新に伊賀や萩風のものを作つた。然し絵はその後も時々高村右晔に習つたようである。

その後野崎佐吉も失敗して、鶯谷の窯を廢めたので此の窯が利用出来なくなり、家に小さな素焼窯を造り、釉がけして能美郡向田や、その他の諸窯へ仲使を介して焼いてもらつたり、また瓦窯へ入れてもらつたりした。もつとも瓦窯は彼が陶磁器に興味を持つ様になつたころからしばしばやつかひになつて居たようである。晩年には、富田忠男が明治四十二年に野崎佐吉より譲り受けた鶯谷の窯で焼成してもらつた。

老後別号を「老竜鱗」と呼んだ。之は木米が「九々鱗」と称したのに習ひ、庄平は「松谷」の松をとつて老松樹の意である「老竜鱗」としたのである。

晩年には「藪庵」とも号し極く少数であるが、「藪庵」と印した作品がある。

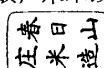
彼は八十二歳まで仕事をし、明治四十五年三月六日に八十三歳を以つて小川町の家で、老衰のため死亡した。

墓所は金沢市高道町善導寺にあり、木米が焼いた窯跡を背にして建つている。「天保十亥年七月松屋源兵衛」とある墓に「専誉西念居士」と云う法名と一緒に葬られている。

銘



名款は初期時代しばらくの作品には、ほとんど(世米)印を用い、多くは羽毛目、或は萩類に見る。又(世米)の印を捺したこともあり、南蛮急須等に、少数ではあるが(世米)印を捺したものもある。

其の後は(世米)印を捺す様になり、これが最も多く、代表的な作品の大部分は此の印を用いている。

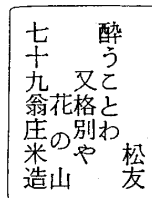
又(世米)印、春日山の印を用いた事もあり、多くは青磁等に見られる。これは、これら両印と並べて(世米)印を捺したものが小數乍ら存在する故、木米以来の伝統的な銘を庄平も用いた事が解る。と染付で書いた水盤も現存している。

七十歳以後の作品の多くには歳を入れて、「〇〇翁庄米造」、又は「〇〇庄米造」等と刻銘を入れている。又或る作品には、(世米)印のみで箱に「〇〇翁庄米造」と書いてあるものもある。が庄平の作品で共箱になつて居るのは非常に少い。これは、作品が安く売れ行きも悪いため、箱など作つて居れなかつたのである。

又鉄砂で「庄平造」と書いたものや、仮名で「庄平」としたものもある。「行年七十二翁 春日山庄米造」と刻銘のある水指や「庄米造之 行年七十一」等としたものもあり、晩年には快心の作にその時の気分によつて種々の銘の書き方をしている。

尚晩年には、(世米)の印を用いたものや、箱の印である・の両印を作品に捺したこともあり、多くは歳を入れた「〇〇翁庄米造」と刻銘の下に用いている。

八十歳を過ぎてからの作品で、「八十翁藪庵造」と刻銘を入れたものや、(世米)の印を捺したものもあるが此の号を用いた作品は、極く小數である。同時に(世米)印を捺した作品もある。

尚又 

と刻つた掛花生があるが、「松友」とは庄平の雅号であるのか、或は「松友」と云う人の句を刻したものであるか不明である。

作品 (A)

庄平は、はじめ原呉山について茶道を学び、それを通じて陶磁器に興味を覚え、ついに陶工となつたので、彼の作品は一体に茶式風のもので、雅品を狙つたのであるが、最も苦心したのは、南蛮写と、青磁であつたらしい。材料は春日山の土を主としたであろうけれども、各所よりも種々と求め、越中小杉よりは、しばしば曳いたらしく、常に運賃が高くて困るとこぼして居たそうである。

作品のあるものは、数回窯にも入れたりして研究したらしい。經節の置物があるが、これなどは単なる焼き締めに過ぎないが、土の使い分けと、焼成の具合丈で、真物そつくりの味を出して居る。

当時掛花生が流行したのか多数現存して居るが、其の一つ一つに苦心の跡が見え、同じものを二つと作つて居ない様である。七八寸から一尺位の南蛮花生が現存するけれども、無印のものが多く、これは商人の注文で、特に印を押さなかつたらしく、名古屋方面へ随分持つて行かれたとのことである。これが、名人気質の彼には非常に不愉快なことであつたらしく、陰では「今に見て居れ」と口癖の様に云つて居たとの話である。然し貧乏のどん底にいた彼としては、一・二割多く金を置いて行く商人には抗し得なかつたらしい。

南蛮写し

南蛮写しは、庄平の最も得意とするところで、他の追従を許さず、第一人物と称す可きではなからうかと思われる。よく焼き締つていて、作品には何処となく軟い感じを現している。之は庄平の作品総てに就いて云える事である。中にはやや固い感じのものもないではないけれども、総じて形及び曲線等を以つて軟か味を出している。此の点が庄平の作品の最も秀れたところである。

其中でも屋形の香炉や、香合等は、庄平独得のものである。又小皿を沢山作つているが、一枚一枚、皆趣きを異にし、最も味わいのあるものの一つである。

伊賀・信楽写し

花生、皿等を作つているが、これも庄平の得意なもので非常に良い味を出して居り、特に伊賀写しは秀れている。

青磁

今日一般に木米青磁と称せられている物の中に、庄平の作品が相当に混同されている様である。木米青磁も黒ずんでいるが、庄平青磁は、更に黒味が勝つてい

る様である。

萩写し

萩葉を用いたものは、相当沢山作つて居り、品物の種類も非常に多い。

交趾写し

香炉等を作つているが、摘みは庄平独得の獅子などで出来ている。

染付

磁器の盃に染付で安南写しを作つている。又水盤等の内面をコバルトで塗り潰したものや、鉄砂で粗画を画いた皿等がある。

上絵

上絵物については、絵があまり上手でなかつた為かあまり作つていないようでも有つても極く少数であろうと思われる。然し庄平の作に、当時の画家連中が画いたものが、現存している。又盃等で緑に金を塗つた物がある。

御本・伊羅保写し

余り多くは作つていない様で、然も庄平独得の味が出ていない様である。

楽焼

茶碗だけではないかと思われるが大槌焼とも異り、庄平独自の楽焼である。

その他三島、唐津、瀬戸、瑠璃、天目写し等も作つているが、瀬戸風のものでは実に良いものを作つている。

庄平の技工で特に目につくものは、羽毛目と篋刻である。庄平は、字が得意だから、水指や花生等に文句等を篋で刻つたものなどがあるが、篋刻は実に達者なものである。

作品 (B)

盃

庄平の作品中主流をなすものは、茶器である。その最も多いのは茶碗であるが、水指、鉢、皿、花生等も作つている。然し最も面白いのは盃ではないかと思われる。盃には、庄平の研究した総ての焼物の種類があり、総じて分厚く出来て居り、形も種々で、非常に種類が多いが、同じ様なものはそう沢山は作つて居らず、皆それぞれ変つて居る。

茶碗

茶碗も大変種類が多く、羽毛目のものや楽茶碗では秀れたものがある。庄平の茶碗は割合にずんぐりして

居り、篋等をつかつたりしてこせついたところがなく、一見無造作な様であるが、一風変つた味をもっている。

水 指

どつしり量感のあるものを作っている。

皿

南蛮写しの皿は、庄平の作品中でも最も秀れたものの一つで十枚、二十枚等揃のものでも一枚一枚全部その趣きを異にしている。

二十枚揃の羽毛目の皿があるが羽毛目の具合もすばらしく傑作の一つである。

花 生

大小形も種々あるが量感があり、花を生けて良く映り、この点全く実用的で、数も相当に多い様である。又掛花生では種々の形のものがあり、面白いもの一つで、庄平の本領は、花生と皿において最も良く發揮されているのではないかと思う。

煎 茶 器

庄平の作品は抹茶の方が重であるが、煎茶器も作っている、茶碗・急須・湯冷し等対のものなどがあるが、煎茶器に於いては庄平は、他のものよりもよほど、すつきりとした作り方をしている。急須では摘みが良く出来ている。

捨 り 物

お多福・達磨・桃を持つた人物・牛童児・兎・獅子等の置物や、富士形や屋形の香炉、或は屋形香合等を作っている。

捨り物中最も多いのは、所謂「庄平の獅子」であり、種々の形をし大小さまざまで、焼も締焼のみのもの、釉の掛つたもの、色の入つたもの等あり、顔なぞユーモラスで、実に面白く出来ている。然し銘の入つているのは割合に少い様で、其の後これの偽物が沢山出来ている様である。

捨り物中最も秀れたのは牛童児の置物である。庄平の晩年は頗る貧窮に陥り、何もかも売り払つて糊口をしのいだ様であるが、仏壇と此の置物だけは死ぬまで放さなかつたという、極めて会心の作であり、牛は締焼で童児の衣に瀬戸釉を掛け髪と瞳は黒色をつけてある。作行も写実的でガッチリして居り、牛だけでもよく、又童児をのせてもよい。庄平作品中の傑作である。然しこれも無銘である。

桃を持つた人物と兎は写実的に出来て居るが達磨は獅子と一種似たところがあり、顔の表情などは庄平独得に出来ている。

屋形の香炉や香合では藁屋根の柔い感じを実に良く出して居り、特に香炉の方は秀れている。

その他型物の皿や香合等も作っている。

絵

庄平は嘗て絵を勉強した時のなごりか達磨を画いた絵が現存している。庄平は絵が上手でなかつたと云われているが陶磁器に画かれた粗画などには非常に面白いものがある。

人 物

庄平は小柄な痩せた、律義な人柄の良い人で、老後は美鬢を蓄えており、又半面極く隠逸な風格の持主であるが、非常に信心深い人であつたらしい。酒は少々たしなんだ様で、趣味としては謡をしたらしく、当時一緒に習つたと云うことを古老から聞いた事がある。

彼は非常に根気のいい人で、何時も泥だらけになつて仕事をしていたと、庄平を識っている人達は言つて居る。

七十歳過ぎに、例の仁清の富士形大香炉の写しを作っているが、その中の一つは恐らく誰かの注文で作つたものであるらしく箱に「富士香炉」と書いてあるがこの箱書きをするのに数回新聞紙に種々の書体で下書きをして、その中の最も気に入つた書体で箱に書いている。

能書の称ある庄平にして然も七十歳を過ぎて箱書きをするのに、数回練習をして始めて箱に筆を取つている。それでも庄平の作品に対する心構がうかがわれる。ところが練習をした新聞紙で香炉を包んで納めたらしく、其の新聞紙が箱の中に折り畳んで今でも残つている。

彼が作品に対する真剣な態度と同時にその半面世事に如何に無頓着であつたかと云うことが此の一事でも解る様な気がする。

む す び

彼は一般の陶工の如く、年少の頃よりその道でたたき上げて一人前の陶工となつたのではなく、中年になつてから本当に陶磁器が好きになり、陶工を志したのであつて、どちらかと云えば、専門の陶工ではなく、素人の陶工と云つた方が良い様な人物で、以前には中流の生活をし相当の資産も有して居たのだが、京都より帰つて陶器師となつてから、其の経営に全資産を投

じ、八十三歳で死亡する迄作家として終止したのであつたが、庄平は自分の数寄趣味より出発して世間に仰合しなかつた為、事業としては、全々失敗したが、其の為彼の作品は極度に個性を發揮し、独得の作品を後世に残した点は、大成功と云わねばならない。

彼の作品が、今日人々に好まれる様になつたのは、真面目に懸命になつて作り人に褒められようなどという事は微塵もなく、ただ作りたいから作ると云つた様な、何の術いもないひたむきになつて作つたところが作品に表われているため、好感が持たれるのだと考えられる。

庄平の作品を観る場合、或は上手と云う点では他にもいくらも上手な陶工もあるし、器用さの点でも庄平はけつして器用とは云われず、どちらかと云えば、不器用と云つた方がよく、作品も別にすつきりしたと云われる様なところのものでなく、むしろ鈍重な感じのものが多い。併しながら量感のすばらしさと、どつしりとした安定感に至つては全く群を抜くものがあり、それにもまして、庄平の作品に接してその作品の持つ一種のあたたかみと云うものは、およそ他の陶工の作には無い良さであらうと思う。

庄平の作品は、精巧を云々するより、所謂面白いと

形容され、或は上手と云うより、良いと云つた方が適切である様な、如何にも捨難い、一種の風格を持つた作品で、上手と云えば、これほど土に一種の愛情を持ち土を上手に生かした陶工も少なからうと思う。庄平の仕事は手先のみではなく体全体で作つており、作品は作者の人格の反映とは云え、これほど個性的で、しかもその作品はどれ一つを観ても展覧会へ出品したりする時の様な、余所行きでない素直で匠気のない佻びた古陶の味があつて、然も誰にでも気軽に使われると云つた性格を持つているものはそう多くはないと思う。

庄平はこの使用目的と云つたところに大変気をつけつたらしく、庄平の作は、皆一体に如何にも使いやすい作品で、時には使つて見て一見無造作に作つてある様で、肝心なところには、神経が実に良く行きとどいているのに感心することがある。この様な点を考える時、嘗て「茶わん」誌上で北大路魯卿氏が又最近では「日本の陶磁」・「世界陶磁全集」等で、瀬戸の春岱や京都の真葛に優るとも劣らぬ、近世日本に於ける最後の名陶工と賞讃されるのも、なるほどと首肯される所以である。